

ふ事情も、あら／＼事情は、どうなりかうなり一寸をさまりある、なれどあちらこちらちよい／＼どの理からをさまりてない、どの理はかるうとればかるい、萬事事情かゝりてくれば、どの理よりないで、これだけ一寸はなしておかう。

△明治三十一年七月十四日本局管長病氣に付電報か

り御越被下度願

さあ／＼尋る事情／＼、尋る事情は、事情にてよぎなく事情とおもふ、まあ一度の處事情はいそいで、行てやるがよい／＼。

△教長様の供でござりますか

さあ／＼心にまかせおかう／＼。

△松村一名行く事の願

さあ／＼尋る處／＼、さあ／＼どちらこちら、どうかう事情、

どうせいかうせいさしづはせん、一時の處ではもうどうとおもふ、どちらどうこちらどう、道といふ上からいそいで行てやらにやならん、さあ／＼心にかゝるだけははこぶがよい。

△明治三十一年七月十四日夜昨朝御本席様御身上御

願申上ば夜深かに尋出よと仰に付御願

さあ／＼時々こくげん順序咄しかける／＼、どういふ事咄しかけるなら、みんな心をしづめて一つの心で聞てくれにやならん、取まぜの咄とはころりとちがふでよう事情聞分てくれ、長い間や、年限／＼長い年限の間、かんなん苦勞といふ道は、まいよく／＼咄したる道の上からみれば、今日の日といへば、どこからどんな事いはうが、みなせかいにちからがある、あぶないこはいといふ處、つれてとほりたる、まだ一寸わからん、つ

れてかへる處もわからん、今日の日く、みんなみみをそろへてきく、きくやうな日が出てくる、元といふ一つの理を聞にくる、元がなけりや聞くものもあるまい、大たいの咄し元といふ一寸前もつてしらしおいたる、元といへば小さいものく、何が何やらわからんやうなもの、かな、はなし土の中へおぼるたね、めづらしくといふてまいても、一寸のめが出る、まだわからんひまがいる、年限からみればかんなんの道はすておけ、しらんからしてすておかにやならんちよいくとの聞かぢりだけはまもりてゐるやろ、又はこんでもゐるやろ、みんなやう聞わけてくれ、元といふ一つの理は何とも分りがたない、年限かぞへてみれば一寸是かけくといふ、三十五年あと以來、一時理にわかりあるのもあれば分りがたないものもある、つとめ場

處場處よう聞分、何やらわからん、つとめ場處は世の元といふ、せかい今はみんなみにきいてゐる、此元ちいさいものやといふ、それから順序といふ、かくれはしり年限といふ、どうもおもはしくはた、ん、おもはくた、んから、とびらひらいた順序なりたる、これはふるい事やない、みな聞てゐるやらう聞分、今晚の刻限は長いで、その心えで聞てくれ、しかけたら十分する、年限の中にはいろく道ありてどうしようやら、どうならうやしらんとおもて、もう年であるか、今年であるか、年があけたやろか、おもひくまぢかねた、年限の道すぢわかるものもあればわからんものもある、世界にわかるやうになるから、順序とほりたものはわからんやない、こちらへきくあちらへうつす、道の理うつしかけたる處、めんくもしやんしてく

れ、今日の日に始まつたのなら、たれにどうといふものもな
い、たけ／＼の理おもいかるいはない、順序を聞てくれにやな
らむ、かやし／＼の咄し是までどんなはなし、順序の理はさと
してくれん、二十年の理はあら／＼夫々わかりある、十年の年
限ありて、元を聞分てくれるよがない、そこで十年くどき咄し
をする、咄しをすれば心にかんじてをさめてくれるやろ、よう
聞分、つとめ一條はでけずかんろふだいもせかいわからんから
取はらはれた、あれでもうしまいやといふた日もあつた、世界
どんな事あつても、つけかけた道はつけずにおかん、甘露だ
いはいつの事とおもふ、つとめ一條のだいにもつとめてゐるや
ろ、みな咄してゐるやろ、なれど何やらかやらわからん、どう
でもかうでも甘露だいつみたてる／＼、三十年いぜんあちらも

こちらも草だらけ、はそんばかり、たちやかぞへてみよ、みな
かりやだちにたてかへ、今日はどこにもかりや／＼、ほんに成
程といふ、國々それ／＼にもできたる、年限たつた、ず、順序
草ばへの中からの理を聞分てくれくどきばなしといふ、杖柱と
いふ、一年二年三年といふ、誠の／＼つれてとほりた、一人順
序の理があるわい、さしづまりた日あるわい／＼、あつた時に
はどうするか、ふるい事はさしおいて、人間といふ心はびこり
て／＼、それにつきそひ、やう／＼つれてとほりた心さつして
みよ、順序になるかならんか、聞分一つの理から、心を合せて
かうであるといへば心のさぐりあひ、うたがひはあらうまい、
證據あらはれていけば、まちがひはあらうまい、一日／＼みえ
くる／＼、たのしんでゐる／＼、たのしみの元といふはちいさ

いもの、もう年があけたらやさあ年があいたらやといふて、十年つれてとほりたる、どういふ事もかげでいふて理をいはん、かげでおもふて理をさとさん、是がくもりの第一といふ、此理聞分、どんな事もおもふたとて、できるかできぬか聞分、こんどどうなるやしらん、おもひくの日をおくりた事をおもへ、どうなりかうなりかうして、じつとしてゐたらわかる、日きたらわかる、くらいてはならん、聞くやいなや、心のおんしん、これだいにしてくれ、何ぐんさとした所が、同じやうにおもふ中には、一つわしはかうおもふ、どうおもふと心にをさまらねば尋ぬるがよい、尋ねたらさしづする、これにちがひないとおもへば、心にをさめるがよい。

△御本席様の事情で御座りますか

さあく／＼中には一つの理もわかる、又中には一つの理もある、一段二段三段、一二三、是までちよい／＼咄したる、一二三咄しかけたく、よう聞分、どういふ咄しからつたへるなら、うらはかじやおもては大工、聞分ば神の守護、十二下りのとめは大工、これさへ聞分たら、苦勞したいといふてもでけんが神の守護、はたらきわかりたか、うらはかじやおもて大工といへば何やろといふ、中には古い咄し聞てゐるものもある、よく聞わけ。

△一寸しばらくして

さあ／＼言葉をだいにして身の内入こむ、言葉をだす、今日やきのふの理で言葉を出せるか出せんか聞わけ、どれだけのかしこいもの備ひ入れたのやない、元をおもへ土の中に種をおぼり

た咄し、順序つたへたる、これも同じ理、よく聞取てくれ。

△又しばらくして

さあ〜元々十年の間といふ、わかき神ともいふたやろ、それはとんと古い事で聞わけにやわからん、若き神といふた、十年の間わかき神といふ、このよ一つ順序の理、ならず〜の間、順序をさとせば、此元だといふは一寸にはさとせん、いたためなりとかゞめてなりと、名は秀司といふ、このかんなんもよう聞分てくれにやならん、わかき神名は小寒、これらはならん〜の中順序とほして、わかき神ばづつとぜんにくれた、しつてゐるものある、よくつたへ、又秀司といふめん〜の心、樂しみ一寸とほりたなれど苦勞の道すぢ、どうなりとして通りた、内にすつきりないやうにした、中に一寸咄しにくい處もあ

る、年限古き處どうであつた、かうであつた、それはなあといふ事もある、よくつたへ合、はなしてくれにやならん、是が第一改めかへてださんならんもの、ださにやならん、聞てまんぞく、しらん事は尋ねてくれ、尋てわからん事、席に尋たら、順序の理は十々の理にさとす、取ぞこなひ聞ぞこなひありてはならん、中にめんどい處もある、きかさん事もある、十分にくらしてゐる中すつきりないやうにさした、ないやうにしてしもふてから三十五年といふ、それはどうにもかうにも、つたへやうにもつたへられん日もありた、聞てゐるものもある、目にみてゐんからどうもならん、そんな事といふものもある、あちら身びいき、こちら身びいき、一時のみちに勝手〜の咄しは何にもならん、ぜん〜咄しの理にもある、なるかならんか、あざ

やかわかりたやろ、身びいきはならん、こふのう理はいつになりても效能あるほどに、こふのうのないものは、どれほどはびこつても、ふつと吹かれたやうなもの、よく聞分、なんぼでもくももうであるか、おもひく、年限は十年よもすぎたる理はあつてもおぼれてゐた、こくげんの理がきたら、どうでもかうでも出てくる、十々の心は一つの理にして日々といふ、よう聞分てみよ、どれだけはこんでやりたい、どうとおもへども、一日の日に一日のしごとでけるかでけんか、聞わけてくれ、一日の日に仕事出来る事、ほんにおぼつてきたがわかる、まあくといふ處聞分てみよ、是丈け咄したら、一つくの理をひきあはしてみよ。

△しばらくして

さあくくく、もう一こゑく、さあもう一こゑ、さああちらのはなし、こちらのはなし、みなたいていつたへた、是よりなるならんの理をきけ、まあかうした中に、これはどういふものである、夫に咄しあふてくれ、順序のみちつたふてくれこれはどういふはなしであつたか、わかりて知てゐるものは知てゐるだけ、しらんものに聞かしてやつてくれ、一ことだけでも年限のあとには、かういふ事があつたとしらしめてやつてくれ、しらんものはむりはない、そこでむつかしき事いふのやない、何年あとわしはそこまではしつてゐる、それからあととはしらん、しらん事は順序、席に尋ねてくれ、時々の理をもつて、順序さとす、さとせばわかる、これで分れば、一つく取まとめてくれるがよい。

△明治三十一年七月二十五日郡山分教會長平野樽藏

氏三ヶ月程以前より左の耳なりてきこへませんに

付御願

さあ／＼まあ分教會といへば、いく分教會もおなじ一つの順序、地場といふ多分の分教會や、信徒一つこつから信徒のりを筆取りてよせ／＼、一つうちもそともへだてない理、修理肥はどういふもの、世界から修理肥をだすか、修理肥をだすは元にある、修理肥をだす花が咲く實がのるは、どこからのるか、みなさきにのるのや、元は修理こん何人ある、日々をさめかた一つの理はこへである、一つの理はたらきするまんぞくする、たのしむこれよりたのしみはない、地場屋敷あきらか、屋敷修理肥ちがふ、そも／＼修理肥違ひながる、世界に此事順序きれい

にかきだす、とほるだけ元といふ、きれいにみえやせん、この理き、わけ、たゞ一つみな一手を神ののぞみ、どこでどうかしこでどう、みな順序の理で神のはたらき知らんか、是わかれば身上一つさわりすつきりないものや、そこへみなよろしたのむといふ、これよりしんじつはない、上も下も中も三つあるくおき／＼だけ心をはたらき、元にくわき、するにくわきさんらん、これはやぶれものにもいれたやうなもの、あちらもこちらもつてあるけば十のものありてもどこへおとしたやらわからん、心をつなぎあひ、やぶりたいものにいれたやうなもの、ものおとしてしらん、かる／＼一つ理これをちがふものをへだてる理はやぶれたものもおなじ事、どこからたねをもつてでるやらわからん、何名何人ある、此の順序へだてなくようへだて

るはやぶれいれもの、これ一つ治まつたら、なやみはすつきりないで。

△おして御本部より先生一名御出張申して御諭しも

らひまして宜敷か御願

さあ／＼尋る處、一人事情はなしかけたる、ぜん／＼一つ心にもつて本部からいく事はいらん、これだけかういふことである、きゝとつて心え、ほんにさうじやなあ、第一へだてるといふはやぶれのもと、いふ。

△明治三十一年七月二十八日學校設置御願

さあ／＼たづねる事情／＼、どうも一時の處はどうも一時の處はだん／＼尋る處、これ一時にゆるさうといふ、一つの理はどうもはかりがたない、時日の理をき、わけて、さとす理は心に

まかせおかう、一時そんならすぐと設けといへばいさむやらう、なれど元々通りた理き、わけみよ、何もない處からどうなりかうなり、あれこれどんな年もあつた、どうもならん處からほんのきやすめをつけてある、心に治めてけふの日、よき日ばかり、ものみけんぶつのやうな心ではいかん、其れでは將來の理治まるか治まらんか、そんならどうしたらよからうとおもふ、ほんのかな、理からさとさう、生れだし生れかはりの理まで、だん／＼さとしたる、一時の處事情がならんといへば一時心のやすめはでけようまい、これも一つはなしにしておかにやならん、どうもならんから世上には、この道一時の處今日の日のがれられんといへば、のがれられん、どんなへんじよへ出たとて自分一つやらうといふ心あればあざやかなもの、一時そん

ならといふてゆるしたら、これまで年限の理がうすうなる、これがざんねん、けふの日どんなならんいへば尋る、咄しさとする理、みんなそれ／＼と／＼には辻々あるやうなもの、道さき／＼龍頭でけたやうなもの、一時願ふた處がかういふ理であつたと、さとさにやならん、これまでかうしたのにゆるしないため、かうなつたといへば一時心がをさまるまい、一時ほそ／＼の理ほんのおふぼふの心を以てすれば、みんな心にどうりといふ、一時どうりとしてゆるしおかう、ゆるしてやらう。

△明治三十一年七月二十八日東分教會整理に付山澤

永尾兩名出張御願

さあ／＼尋る事情／＼、處々ではヤアをさめかたがいかん、にんがもちひんどうやかうやみないふ、これがどうもならん、取

ようがまちがふからさき／＼までまちがふ、元々の理をうしなふからさき／＼までうしなうてしまふ、それではきのどくや、ずるぶんあちらこちらどうりと／＼の理をもつて一つの理にあつめてくるがよい、さあ／＼あつめてこい／＼。

△明治三十一年七月三十日梅谷四郎兵衛倅梅治郎前

身上指圖より御願

さあ／＼だん／＼事情以て尋る、さあ今日の日順序の理、尋る處ふるいはなし、ふるい事情さとする、それから今日の日といふ、年限かぞへばふるい事かぞへばどふいふ事にならう、かういふ事にならう、心にたへられんなあとおもふた日でおした日、それより長い年限やう／＼年限日のきたり、此道といふどうでもかうでもたゞ心一つの理、外に心はおもふやない、又い

らん、まいくつたへたる、又刻限にもさとしたる、どうでもかうでも心よりのこらせん、所にめづらしいものあつたてしゆんはづれたら、さうやつたなあといふだけや、此道は天よりのつなをおろしたる、つなをもつてさとしたる、天よりのつなをもつてくれば、その理はいつまでものこる、かずく順序は何ぼうでもある、なれどそこへくさとしたる、みんな心得になる、さとしたら今日からといへば今日、さあ身上一寸事情さとす、事情一寸しやん事情はあとといふは身上すみやか、これが手びきといふ、この理たがはんこれまで長い年限はなしにきく、みてわかる、ふるいはなしつたふた理はいつまでも尋る、事情がないく、それく何時なりとゆるしおかう、又あとくそれより治まりたるものあれば、今日はいふさしづありたと

つたへ、どちらもおなじ事く、若き順序若き順序にたのおくといふ。

△押て梅治郎分教會の方勤める事御願

さあくもうふかいのぞみはいらんく、一通さいあざやかならつうじようふかい心いらんく、事情筆とつた理はだしてみればいつになりてもわかる、この理さとしおかう、さあ何時なりとゆるしおかう。

△押ておたね様母に妹分教會におく事願

さあく尋る事情く、又一つ若い順序、又たよりといふ、たがひくたよりといふ、それは心にまかせおかう。

△押て本部より一人御出張ねがふて分教會役員部内

支教會長のさとしもらう事願

さあ〜まあ一時の咄し、みなそれ中に順序あざやかさとし、
みな〜心一人の處、何時にてもゆるしおかうほか〜しつか
りとりしまり、心にかゝらんやうにせにやならん。

△明治三十一年七月三十日堀内菊松身上御願（二十

八歳）

さあ〜身の處〜、たづねる事情、さあ〜身の處どうもこ
れたづねる事情にはみんな一つ〜理はぜん〜より順序とい
ふ理ある、一ど二ど三どいふ理はようき、わけさ、にやなら
ん、同じ兄弟〜〜しんせつなけにやならん、又内々しんせ
つはべつのももの、のくにのけんきるにきれん、ようき、わけ、
どういふ事かういふ事、世界にする事も内々する事も、よい事
わるい事みなわかる、そこでき、わけ、身上かはり〜〜よ

いかといふは又この理、兄弟〜又おやといふ、この順序き、
わけ、どこがどうなる、べつだんどうとない〜、事情心にあ
れば世界にある、心にあれば世界にある、この理は一寸わから
ん、この理たてかへほんに道やなあ、心に理があれば世界にあ
る、これからといふこの理き、わけ、順序心にあれば世界あ
る、この理き、わけさせ。

△おして

さあ〜たづねる事情〜、たづねる理はまあ萬事處はそれ
〜心にある、處とゆへば處、かうしてたちこせば處、なあお
もふ處、あと〜はいつ〜までも又かはりて〜、このさと
しおかう。

△又おして

さあ〜たづねる處〜、はたらくははたらく、日々の處、日々はたらいてゐる中や、はたらくははたらくだけあんしんさ、にやならん、ようき、わけ、心といふものはさきのあんじなくばたのしみ、あんじありては道の順序といへやうまい、あちらといへばこちら心にかゝらん、よう心にかゝりてはたのしみはたのしみにならん、心にかゝらんやうするがよい、この理き、わけにやならん。

△明治三十一年八月二日園原村西浦彌平身上に付御

願(五十五歳)

さあ〜尋る事情〜、さあ〜身上に心えん〜、日々の處いはずかたらず、事情まあどうたづねようか、あすたづねようかおもふ、順序おくれたる、もう何でもかでも一日尋る處、萬

事の處順序さとしておく、所へ一つあちら一つ順序はじめかけたる、内々おもふかげなき日を見て通りたる、又あと〜どうである、おもふた日事情かはる〜、ようき、わけめん〜にも心に心えん事情から尋ねた、かういふさしづあつたと内々理に治めてくれ〜、どうおもふたてかうおもふたて、なる理これが一つ理、ならん理はならん、これが一つ、いつ〜おなじ心内々順序をさめ、又年のとれたる人たいよぎせん事情いふまで、そこでこれから身上不足ありてどうしよう、めん〜わかりてあつて内もちひる事、心ひかへてる、道理きくもちはいらうといふてはいらるものやない、はいらうまいといふて通らるものやない、道は長い年限よういでならん、今日事情さとしおかう、取つぎ筆をしつかり〜とりて、其れよりどうかくどう

一つ理をむすんでやつてくれるやう。

△おして本部の方へ御越しになる處直に運ばして貰

ひます

さあ〜もう是よりはもうはやく萬事きいた、いなや順序はこ
び、日をおくり〜尋る、まあはこんでやるものみんなしんせ
つ、こゝにあるこの事、順序いのいてくれねばしようがないと
いふやうな事ではならん、事情日々さとしたるもおなじ事、よ
うき、とつてくれるやう。

△明治三十一年八月二日御本席様の南の方へ普請被

下事御願

さあ〜尋る〜、尋る事情〜、さあ〜しつかりかきとつ
てくれにやわかりがたない〜、どういふはなしからさとしし

よう、もうかさなりて〜かさなりはふている、まあなんとも
なくしてとほりきたる處、もうあちらもこちらも、二三年以來
どうもならん、もう第一理うしなうてしもてる、第一理うしな
うてはならん、わかきものあちらへであるく、こちらへである
く、なんたる事である、どういふことである、おもひ〜日をお
くり、一日の日さしつかへなく、ようつとめてある、なれど
よる〜の心をたづねてみよ〜、おもふところたづねてみ
よ、ちがふからくもりかゝる、おなじどうかといふ、おほい
のまちがひまたがりある、日々處はなしきいて長い年限、あち
らに何がある、こちらに何がある、年限かぞへてみよ、一時の
理でなりたのやあるまい、でけたのやあるまい、ようき、わ
け、ふるい〜中に、どこからみたて、どこからながめたてわ

かる、ふるい理はこぼれてしまふ、ようき、わけ、どうにもかうにもならん處から、今日までの年限をみよ、年限をみればわかる、此道世界どれだけの道なりたる理はこぶ、今一時になりたんやない、元々どうしようかしらんかうしようかしらん、はなしあひようき、わけ、席といふこれまで十年ちよいく、これまで心き、わけ、親子もろともふせこんでく、たのしみしかけ、すがたみえん理たのしんで、かげすがたもみえん理をたのしんでとほりきたる、理すつきりわからん、あのやうまだといふは、一時これき、わけて順序あらため、なるほど、いふ、しんじつもつてたづねあひく、ふるい事しらん、もとくどうなるやしらん、かうなるやしらん、日がらしらんくはづや、どこにどうしてゐるやらどうしてゐたやらわからん、よう年

限かぞへてみよ、さあくどきばなしくどきはなしやで、今教會はいつたら、もうらくやくみなおもふなれど、か、りどうもむつかしいてならなんだ、そのとき杖はしらにした、杖としたわい。

さあく、今日の日たのしみあたへたるやうなもの、なれど事情身上せまる理、おなじ理と心に順序はこんでくれにやならん、いく間入物といふ心にふく理はよういやない、いつまでたつてもちよいくはなししてやる、たれが順序はこぶ事しらんから、心にうかぶ事でけん、ようき、わけにやならん、人間くはなし、人間くのはなしなら、どうでもなるやうといふ、ようき、わけ、親子もろとも屋敷ふせこんだ理をもてみよ、あら小供や、あら女といふてゐてはなるまい、神だましたのも同

じ事、神がだましたのやない、かやし／＼はなしする、十分つたへてくれ。

さあ／＼ふしん／＼、どこへなりと、さあ／＼うらはかぢや、おもてはだいく、この理どこからでたるか、かんがへてみよ。さあ／＼一てんをうつてあらためかへ、たちやといふ、今一時いふやない、ふるい理にむねかず三げん／＼この理どういふ事、これはきいたものもきかんものもあるきいたもの、たにじはふしんといふ／＼、一けん、はじめ又一けん、名は一つ／＼かれにどうする、たれにどうする、順序き、わけ、おや子もろともふせこんだ理き、わけ、たれに宅、かれにむね、三げんしつかりたちならべる。

さあ／＼さしづ／＼、わからん事情ならたづねくれ、たづねあ

ひ、順序をさまるなら、將來一つおさまる理とさとしおかう。

△むねかづ三げんの理どなたと御尋ね

さあ／＼三げんたちや、席順序理もつて、順々の理をもつて、刻限でしらしおかう。

△又おして西の方と東の本席様の方と又南のたてま

すとの三げんでありますか

さあ／＼尋る事情／＼、もう一けんは、なんでもといふは、ぜん／＼はこびか、らにや治まりにくい。

△又本席様二間程と仰せ被下る

さあ／＼尋事情／＼、なんぼうでも／＼、しゆんをまつたてしゆんきたて、はずれ／＼、又さとすれどわかりかねるから、よろ／＼順序さとしたる、人間心でたもつはわからん、人間心に

かけたら、どうとおもふ、ふしんたいていどちらやらといふ理がある、これきゝわけ。

△又

さあたづねるゝ、かゝりといふ、さとした理にもとづけば、どんな理でももどづかる、理まちごたら、どんな事になるやらしれん、これだけしたら、順序なるかこれきゝわけ、どちらやらといふ順序もては、席順序をさめ、今日よい風ふくやうな又あつめはなげにやならん、あつめの順序はあとにある。

もう一ことゝ、今日の日までかげすがたみてるやうなもの、あんしんどこにあるか、たのしみなくして、かげにあるも同じこと、これわかるか。

△明治三十一年八月三日天理教別派獨立運び方御願

さあゝたづねる事情ゝ、尋る事情は大に一つ心といふ、さあゝ折時のじゆんともおもふ心もあらふ、順序といふ理がある、心さへきれいな心もつて居ればきれいな道がつく、あちらこちらから十ぶんうまい事いふてくる、うまい事いふてきてもじきにとりやせん、ふるいこしらへである、うまいといふ理どこからどういふてくるやら、みんなそれゝよう聞ておかにやならん、世界からあれにしたらどうとのぞむばかり、世上からのぞまれる理を聞わけてくれ、世上からむさくろしといふた中から今日の順序理があるからあざやかな道、きれいな心からはこべばきれいなもの、せいたぶにやならせんゝ、きれいな道はせいてはいかん、せいてはきれいとはいへん、なつてくるがきれいふもの、此順序聞分てくれ。

△おして神道本局より電報にて至急一名上京の事申
越されしに付御願

さあ〜それが一つ尋る理である、ほつとか、ればよい方には
つきやすい、此理さへか、ればよいといふは世上の心、此道と
いふ世上からきはれ〜てゐた、今の處世界からけなりて
〜ならん、ならんよふになりたるが此道のひかり、よう聞
分、おしい處しもたなあとといふやうな日もあるなれど、さき
〜あきらか順序の理もわかるやらう。

△おして松村氏上京御願

さあ〜尋る事情〜、何か心まち、一時たよりとしてゐる、
順序であるから萬事の處はまかせおかう〜。

△明治三十一年八月四日寺田半兵衛身上御願

さあ〜だん〜たづねる事情〜、ぜん〜よりもどうもこ
れ心えんといふ、他にもどうであらう、一日の日はたいへん事
情なれど、順序追ふて咄しをつたへ、一時じつと事情一時たへ
られんといふ事はない、なれど心安心ならんといふ、尋るから
第一事情から一日の日をもつて順序の理さとさう、一時たのし
み〜、一つの理をたのしみ中に事情たいていやない、だん
〜の理をもつてつたへたる、わかきがかうなり、又かうなり
たへられんは理であるなれど、よう聞分、じゆんといふなす事
情の理、一時はおもひひらく事はでけん、心に理がをさまりあ
ればこそ、今日までといふ、わかきつ〜く事情、取次よりつた
へてくれにやならん、順序は前〜それ〜はこび、なれど一

時順序は一寸をさまりた、なれど重々の理におくれてある、ほんのそのまゝ、このをさまつた理から一寸そこで順序さとさにやならん、ぜんくたのしんだ理あきらかたのしみない、長いたのしみもわづかのたのしみもたのしみはなけりやならん、さあく今日よりしつかりさとさにやならん、しつかりさとしてくれ。

△おして本部員に引上げの御願

さあくたのしんだ理、どうでもかうでもみんな一つの心のをさめてやつてくれ。

△明治三十一年八月四日前指圖より普請事御願

さあくだんく尋ねかやす處く、幾たびの席順序にも同じ事、ぜんくもつてさとしたる、一てん一つ改めて、事情はわ

からん理はさとしてないく、なんでもかでも、はやくいそいでくれにやならん、あとくさしづみて、これであつたかいなあといふやうではどうもならん、ごぶすぎたらはこぶまでのもの、ぜんくさしづ、かうしたらよかつたのやといふやうな事ではどうもならん、わからねばたづねといふ、ほんの心におもふただけは、どうでもおもふ、いつの事のやうにおもふてはならん、年限はおくれてある、よう聞分、世界それく、こどもつれてもどる、つれてかへる、日につとめさしたる、よるくおもひひらき、めんくにさしづしてはやくはこんでやらにやなるまい。

△おして一棟の處は政甚様の處でありますか

さあくとうぶんく、順序のとうぶん、これより聞分にやな

らん、今一時席順序もつて日々處、たちものをさまりたる處、はたからみれば、なんのためとおもふやろ、ようき、わけ、ゆびををつて年げんかぞへてみよ、たちや一條、何のためにこしらへたるぞ、たれの用にこしらへたものぞ。

さあ／＼なんでもかでも、たちや三げんのむねならべ／＼、なべた處、席つゞ人間は、たゞ一ツ刻限、いつの事ともわからん、こくげんあつたら、さだめさきにあるとも一時さとするともわからん、よう聞分、もらひうけたふせこんだといふは、人間と／＼のはなしか、よう聞わけ、さあ／＼こゝろえ／＼いさみくればいさむみちがある、しやんすればしやんするみちがある、一時にをさめやうとおもへば、をさまる理がある、たちや三げんをさめた處、あちらどうこちらどうとはさとせん、席日

にはたらかせば、はたまたのしみやろ、なが／＼のたのしみやろ、あとめん／＼といふ、よう聞分、一年二年三年の理でできるか、よう聞分にやわかりがたない、どれだけのべんしややとた處がでけん、天然でできたもの、天然をしらんか、天然をしらねばなにもわからせんぞ。

△明治三十一年八月十四日永尾芳枝身上御願

さあ／＼たづねる事情／＼、身上にどうも心得ん事情といふ、心えん事情たづねる、事情はもうこれなか／＼これなんぼうとも、つむにつめん事情つかへたる事情さとする、あちらこちらとんとどうもならん、今日はたづねにやならん日になつたる、事情つむにつめん事情になつたる、身上さわり／＼もだん／＼あるだん／＼事情中にどうもならん事情ある、あすは今日はお

もひながら、日々よる／＼たへられん事情、この事情き、とつてゆつくりかきとつて、あさおほく事情あちらでこちらで、これはどうもなんともいへんといふてさとせんといふはわからん、これまでみちすがらよい道ばかりやない、かんなん苦勞いろ／＼通り、やう／＼日およんだる、ようき、わけ、ふかいはなしする／＼、心といふ理おそれ／＼たがひ／＼理もつてはこばにやならん、よい理といふはうづみよい、よいりはうづみよいといふはどうであらう、これみなかつてといふ、かつてといふ理は此屋敷には一つもない、長い年限つえはしらといふ理はふかい理かあさい理か、これき、わけばなんのさわりもない、みなおれも／＼かつて通りてる、この日がで、からどんならん、あちら又とほりこちら又とほり、こはい／＼といふこんど

通らうとおもふて其道かはりてありたら、いかほどとほらうとおもふてもとほれん、ようき、わけ、長い年限どこにどうといふ事あつたんやない、つえはしらといふ天より入込、はじめかけたる理きいてゐる、これまでながい年限今日からはじめかけようかといふ、つえはしらといふ理き、わけ、き、わけにやならん、き、わけしてみなそれ／＼をさまれば一時にをさまる、これはかうやけれどこれはかうとはこんでからどうもならん、どんなみちつけてもそれしもたらとほれん、三十年いらいおや子もろともといふ、これつえはしらといふ理き、わけ、き、わけばこれおもし理か軽い理かき、わけ、金銭ではかはれん、金銭でかはれば相當の金をもつて行けばよいもの、この一つの理き、わけ、今日のさわりはほこりつよいのやといふものはあ

ろまい、なれど心の理からでるものはかつてにで、るといふていふ、みちはどうでもわが一名もつて日々おくりきたる、大人からをき中にさああぶないといふ、どんな中でも一つのとりやうでをさまるといふ。

△押て政其様の事

さあくはなしかけたら理をわかる、なんでもないやうおもてゐたら、ころりとちがふ、末代ふせこんだ理は親子もらひうけてふせこんだ、やといにんとはちがふ、やとい人ならなんぼかやれ、それで十ぶん、親子の理それくある、これはなしかけたらほんになるほどの理わかるやらう。

もう一だんはなし、席といふ席の心、さしづは席の心のさしづとかならずおもふな、今日の席といふたる萬事一時にたづねば

一時にさしづ、さしづはどこからさしづ、みな理もつたるさしづ、席といふたて心うつりてはなしすればはなしする人間心ある、人間心もつてはかぢといふ理はどこにあるか、聞わけてくれにやならんで。

△明治三十一年八月二十六日(一本二十八日)(舊七)

月九日)教長様より御別席順序御願(一本教長様よ

り別席の書取を集め事情定め御願)

さあくだんく、日々ひがせまる、處くおほくの中、どういふ道の理になる、おひくの理、一つだんくせきたてくたる、きく處まちく、一つの理をさまりがたない、きかずしらすの理はどうもならん、たぶんくの理、順序しらしたる、これまでさとしておひくわかりくるほどに、順序むつか

しいなるで、おひく／＼世上にきゝとるほどむつかしいなる、十分あらためるなら、守護するで、人々理ををさめておかにやならん、たれそれ日々席く／＼する處、きゝ、ようの理取ようの理で、まちがふてならん、さとする理をかきとり、どれとこれと一時頼むる處、これまで筆取の理は、重々の理といふ、中に一つさとししよう、これだけ取なほし、取ぞこないのないうやう、日の中はこびかけたる、どういふ理も一月二月三月、一つの順序よいにいかん、きいて十分と理、一時の處なにがどう一時定めん定められん、刻限順序もつて、席に赤衣をきせて尋ねばたがはんちがはん、世界きくほど、一時こころえてくれにやならん。

△明治三十一年八月二十六日夜

さあ／＼だん／＼の事情、一つかはり二かはり、順序あらためかへる、これまで十分の理をときさとし、きくにきかれぬ事情ありたる、ながめてみればなにをいふ、年限たちきたる、一時の處にてはんぜんの道とはいはれん、いまあらためてどれからみても、順序心にをさめてくれ、せき順序の理もあらためてくれ、第一一つ初めかけたるはなし、ながらへての道すがら、はこびきて順序、これで一つよく順序にさとしおかう、席といふこれまでつたへてもあるじつと聞て一つの理、なが／＼きゝ、にくい理、きゝ、にくい理はどういふ理、聞きにくいといふは、これと／＼、あたりまへの事、それさとしてゐる、中にもれおちあるやうなもの、これまで身の内十柱の神、たいてい皆さとしある、これまでの道がはつとして、聞ところ聞てしつかりさと

しくれ、これまで道の處さとしある、これとくくあちらも一つ、こちらもよせて順序でとつて、これはいふまでさとさにやならん、もと、いふはいさ、かなもの、年限のなかにさとしよう、席の事情さとししよう、今日からさとしよう、まいくからさとしおいてこれでどうであらう、尋る處かきとりかきぬき事情願ふまで、中にまた一つながい順序、ゆつくりかきとれく、わからぬ處は尋ねかやし、これから順序はじめてやらう、いつくまでおなじ事、席といふ、年限まちてたのしみ、おほくの中とほき處、心をはこぶ處を聞わけば、なる順序の理である、あらためて席を一つはなしかける、もとくはいふまでわかりあらう、あらためて中に一つの理を改め、さあくくみなこれまでしらん、尋ねにやしらん、尋ねてしらん事、

かきとりかきぬき、だい一つ順序中に、兄弟くくといふは子供、この一つの理順序、長い間に不自由さした事も、年限の中一つの理一時もつてくれにやならん、此の一つの理、年限は十ヶ年や、十五年といふは多くの人もできる、たよりそくくにある、ふるいくく年限といふものは、どこにどうしようかしこにどうしよう、どうもならん處、かんがへねばならん、うもれてある、若い神小寒といふ、十年間といふ、不自由く、なんぎの中はなし、かうじやくく、どこへどうじや、よぎなき事情さをはれた、一時の處はのがるにはのがれられん事情であつて、また一つ第一これはどこから咄ししようやら、けつこうにくらされるを、この道のため苦勞艱難不自由かんなんさした事もある、咄し順序ながうなる、ふたりといふものは、此の順序

あらため、どういふさしづも、き、ようとりようでちがふ、年限ぞんめいでいつの事情には、どういふ事がどういふ咄しがあつた、みなぞんめいでゐるから、今日もきいてあすもき、席の順序、一つ一つの事を、それ／＼ふでの中にかきこんで、この道のためあるものをなくしてしまひ、奉納してしまたのや。

さあ／＼一つてんをうて／＼さあ／＼一つもうどうにもならん、うち／＼どうも、日々の處にくどき／＼、日をおくりどれだけこじた、ことふせいでならん、むさくるしい、むさくるしいといひなりこれをおぼつてならん、十年という理がある、この十年たれもよりくるものありやせなんだ、ようがあればくる、ようがなければきやせん、あちらばらり／＼、一日ような

くばこん、これだけしごともある、席順序ならん處、さとさにやならん、今に見ればけいがよい、中の十年道すがら、さとすにさとせん、順序かき取事できん、この道すがらぞんめいでゐるから、すぐときくなら、あざやかなものや、さあ／＼かず／＼、これまで席順序、あらたまる事は、一月や二月三月でする事はできやせん、あちらかきとり、こちらかきとり、大はん書取、咄してくれいよく／＼、一つの順序あらためたら、しつかりしたものや、きれいなものである、がてんがいかねばたつねかやせ、きいてゐるから、しつかりきくがよい。

さあ／＼とほりた道の人があるほどに、あれば人間心であつた、處なるならんよう聞分てくれ。
さあ／＼さうじやなあ／＼、さうであつた／＼／＼、ふうん

く、さうでありく、なあはなしかけく、これく取ませ
く、どんなはなしするやらしらん、おうくよるく、あれ
これなあ何時、よほどなあもう鳥がなく、あれかいなあ、それ
く夜ぜんもなあ今夜もなあ、もふやすもうやないかく、あ
す日も何人よつてかそよ、時の人をかぞへてみよく、だいは
一つく、それにじゆんじていよくどうであつた、その時順
序まだおきてる、神様の咄ししてゐやにいさん、あんたの事は
いふてあしたの日もある、兄さんく、あちらいいつてやすん
だらよい、あいそふならく、兄さんもうやすめく、さあこ
んな事はたれでもしらんで、あのなか寒さもしらず、年限かぞ
へば、三十五年おきてもねても、けふの日になつて、人間もし
ゆつせする、大工であつたと、世界は順序いふである、さきは

かうなるで、神様はかういやはるけれど、さきあんじるで、お
まへどうおもふで、先生あんじ、をまへの處、日々あんじてゐ
る、あんじてゐんやう、こそなあといふた、日く、ふんく
く。

さあくさうじやなあ、これだけしごとくれたら、いつかな
あ、この月、月中にやります、棟上となつたら、どうしような
あ、どうなりとできます、それじや棟上せいく、これがはじ
まり、棟上したらどんな道がついてくるで、神がいひきかし、
どんな事もおもはず道をとほり棟上した、これでよいく、神
が入込んでゐるから、あんばいやうなつてくるで、これは豆越
忠七、大工にみちでいひつけて、人數神殿のまへをとほれば、
拜してとほれ、これでけつこうや、南無天理王命くとなへ、

たいこたゝいてつとめをし、他にゐて一人のやもりこ事がならず、もんをしめてしまひ、なにかまはん、みなはいれく、三日とめおかれ、萬々處の役人にかけてあふてしらし、どうなつとわびして、それより道の順序、すたつてしもふた、そのくれになつていなすと、存命のもの尋ねばわかる、まじりく、人間心をかへてあいまいと、もう道のしらん事はどうもならん。さあく一寸一つはなししよう、ようき、とつてくれ、この道つけようとて心にかけて、子供までかうしてなあと、人をたすける心になつて、そこへく、それからよほど年限、子供あちらから一人、こちらからひとり、たいていでなかつた、どうなるとおもふ、まんぞくしてくれ、またならぬ、心一つたんのふ、一つ順序とさとしおかう。

△二夜目

うんくさあく、はなしかけるく、さあどういふ事をはなしかける、この道といふ、十ぶんたのしましてく、十分たのしました、一つはなし、十分にきいてくれといふ事も、はなしかいてくれ、これまで一寸刻限、一つの理さしづ、一つの理、さあくおされくはさまれ、どんな事してしもた、これからくといふもの、道の理は心にあつても、心にはたらかにやないも同じ事、心にないといふもおなじ事、これだけよぶる、あれこれのさしづ、そのまなんぼうあつても、一寸にしらべられぬ、ぼつくしらぶれば、これまでの道がちがふかちがはんか、さしづといふ、かけにまはるさしづある、すぐのさしづはすぐにわかる、かつてわるいさしづどうもならん、この道すじ

といふ年限かぞへ、何ヶ年の道といふ、くるものにはくんなどいはん、こぬものにはこいとはいはん、いつく順序にもさとしある、この一つの順序むつかしい、教祖といふは女であつたく、學をまなんだものでない、この屋敷、人間はじめたしんじつ一つ、むねにをさめて、こゝ一つ順序、今といへばりつき、どちらこちらくさばへ、そんな時誠一つもなかつた、こいといふても、けふけふといふやうに、十分時々神のいふ事きいてくれば、その時もらひうけ、夫婦もらひうけ、荷物もつて屋敷へふせこんだ、一つの理なんとおもうか、道の心がちがふ、心がちがふ、親子存命かかりからふせこんだ理どこにあるか、わからんか、ちがひないからたれにどうもかうも、十分にいはれた、しんじつ心にもたれてゐて、世界も子のもの、金をもつ

てやとひこんだものでなし、心一つふせこんだ、いつになつてもうごくことなし、萬事の處ははなしかける、この順序本席をいたゞくさとは元といふ理をさとしてくれ、やとひいれたものやない、おまいどうせいかうせいいへん、けふ世界からみても、順序の理である、一つの席であるで。

さあくようき、わけ、なにかどうせにやならん、これまでだんくつかん、だんくしてもそのまま、順序とほりてきた、これからといふものは、萬事みな一手一つの心、あんじる事はいらん、世上はよほど一つ、あちらこちらはこべてある、しばらく日によつて、なんともわからん、この道さへ心一つの理しつかりあれば、何もあんじることいらん、あんじる事をまちかねてゐるとおもへ。

さあ〜とりまぜはなし、あちらもあはせ〜、わからん處は席に尋ね、一つの處は席に尋ねばわかる、夜ぶか、よるにも尋ねるだいをこしらへてやる、大事〜取次、萬事きいて取次、一つ世上かわり、教祖代理、世上あつたはおほいのちがひなきやうに一つさとしおかう。

△明治三十一年九月十九日顔に出物より願、梅谷四

郎兵衛氏身上に付御願

さあ〜尋ね〜事情から尋る、どうもかはつたことである、めん〜道をおしてさしづ通り、理をまもりめん〜心でどうといふ、この身上ふしぎなる、それは心に一つ十ぶんさしづもつてどうも心えんである、通りたるめん〜かつてした事でないも、さしづおもてできしるしをうつて、一つ〜通りきて、

あんじた事も咄し通り、理をきいた通りなつてきた、一時身上かうわかつてきて處をたちのいて、かうさしづどほりなつてきた、みな一つの中にこれまで順序理でなつた、みな年限の理でなつた、それから順序の理なつて、日々とりあつかひ、おれがかうしようどうしようできたやない、みなさしづでできた、年限相應尋る順序の理をさとして、みなてをつないでどんな事、あぶない處も日がたてばそれ〜もたのしみ、心配して日々はたらきの理でなるのやない、そこで一人の中でない、みな〜の中にとする、とりぞこないあつてはならん、ちぎれ〜でもふたぶにはもう一ぺんどうもならん、この一つの理をだいてしてみなこの中取次〜といふ、今日にできるものやない、かうしてやらうといふ理でできるものでない、どんなものでも

おようといふてもゐるにゐられんか、それから順序おほぜいの中おもふな、年限取次しゆんく、今日はひまじやといふてひとりでもよい、道といふあちらこちらの道、十分つくりかけたる、いそがしうなる日がみえてある、とりつぎかずく人々かずくの中、くべつ相當の中をあつめ順序の理をさとする、みくらべて人々くらべあつて一人かとおもへば理をうしなう、ちいさい事とおもへばころつとちがふ、まいよつたへたる日がたてば、かつてだしてはどうもならん、たれとく心うつとしい、つよいとおもふのがよはい、この順序みな相だんしておなじ一つの心、とりあつかひなんでもないとおもたらころつとちがふ、とりあかひ今日があすかへだて、くべつあつてはこれまで早くはなしせにやならん、みなおくれてあるかきとりふでと

りちがふく、さとりちがふく、みなそれくさしづをつくりたりどうもならんで、身上あんじてはならん、是をさとしたらばんじ中とりつぎ一人じやないで、何人の中どうやかうや、刻限順序よみやうでとりちがふ、ちいさい事からはじめ、ちいさい事からこの道やぶんやらひるやらわからん、何年にもうなるく、もうみえる日がみえるとたのしまし、目にみせてのたのしみはたのしまし、よい目にみえんたのしみはなかくやなかつたで、何人あるかけへだてうつとしてならん事もちいさいことはこの理むつかしいてならん、取次中くにもう人々みわけくへだてある、取次何人一人の心、一人のする事もおなじ事、さとしたる順序の理にしてかけりやならんものである。

△しばらくしてから

さあ〜ふでとれ〜、取次一てんの咄し、一てんの理をさとする、さあ〜取次一てんはなしどういふはなしといふ、取次なにやく〜、やくの理はわたしてない、何人あれば一つの理〜、もう順序一人さきにたつて、あと〜そだてるがこの道、にち〜兄弟の中、さきを兄とす、中を順序この理この道である、内々理をさとする、それが一つのだい、めん〜がつてから理がだい、あとからさきからまちがふてある、神のさしづまもりてゐるといへん、この理あちら一寸にごる、こちら一寸にごる、つ、みきればよういならん理がでる、ならん日があつてはならうまい、中はうつくしいくちでいふておこなひとちがふてはならん、ちりがあつて一つの水の中にちりがあつて

はのまりやせん、この道理からき、わけてくれ、これさへすめばきれいなもの〜、なにか一寸〜にごり〜の中できれいなはたらきでけん、又だいいじな事ははき掃除ふきたうへにもふいてする、やしきのなかつみほこりはきそうちがたらんからちりがたまる、かういふさとしあつたとだんじてくれ、またまた一つのはなしある、こくげんつみきりである、順序一時のはなしはしておく。

△明治三十一年九月二十九日御本席様御身上御願

さあ〜、さあ尋る〜、いかな事も、もうこれ尋るから、いさ、かなさしづする、長いさしづ、かず〜してもわからん、さしづは一つもあるともないともない、ちがふさしづはせん、道の爲にならんさしづは一つもしてない、みなそれ

く、人間よつて、さしづすれば、神のさしづはいらん、兄弟の中おなじ兄弟一つならおなじ理、勤めにくいといふ、一日二日三日のあひだといふは、よほど順序理をかさねた理、いくへの理、十のものなら、まあくよう七ぶといへば、そこへそこへあちらこちら、三分よりもちひてない、あと七分の理はどうするか、どこへ尋る、この順序よく、一日二日はどうしてなりと、日はおくれるもの、三日四日たつ中に、順序理をはこべ、中に十日二十日三十日たち、一席二席と道理なんとおもふ、はこび順序理とおもふか、取次あちらこちら、身のさわり、十のもの七分まではこんであるやうにおもふてゐる、なれど三分治まりない、なれどあるなきいはん、さとし理といふ、なにからでた理、人間心日々かつてく理なら、なんにもさしづいら

んもの、事上願日々席順序、どうとつてゐるか、席の身の内と
ういふ理と思てゐる、十年三年あとの理を、のこしおきたる席
であるでく。

事がまちがへはまちがふ、けふからあらためく、これもまち
がふ、かういふ理こしらへた、めんくよりあふて、一日の日
をもつて願ふがよい、席の順序聞分、席がわるいものが、わる
いといふてやすむ席じやないで、よるのくまで、席をつとめ
さしてある、とほく處から、なにがためにとほくあゆんでく
る、かく前席く、中に取次、何名何人ある、けふあすといふ
ものに理があるか、ほんにこれまで順序とりちがひ、人間心の
さしづこしらへた、一日くつもりく、席の順序、けふの日
はどうじや、三日五日どうなりとおくれるもの、十日二十日た

つたら、世界なんときこえるか。

さあ〜一つ理をき、わけ、長いみぢかい、高いひくいと、これに理がある、高い處は高い、ひくいものはひくい、これ高いもの、あちら二口三口、神のさしづけづつてゐるやうなもの、これをよくき、わけてくれ。

△明治三十一年九月三十日午前二時刻限咄し

さあ〜まあ〜、やれ〜、ふん〜、やれ〜、咄しかけ〜、さあ今夜はどういふ事をはなす、年限〜、十年一寸あまり、どうして行とかいがるい〜、こくげん〜、なんぼうこくげんしらしてもなんのさしづ、とんとどんならん〜、十年このかた、つとめせにやならん、つとめでひらかにやひらけん〜、ならん〜で、くれてしもふた、一日前二日前、い

かなること一寸〜、理をき、わけてゐる、中に順序もわけてみせる〜、年限十年少しぜんどうでもならん、かうでもならん〜からくれてしもふた、世上あちらこちら、一寸〜にほひかけ、年限相應のもの、かはいさうなから、このまなび道をつけた、そのまなびの道はしらん、これからさきながい〜年限である、まだ〜一寸にははこべん、一寸すつきりのもの、二分通りしあげたら、おぼつかないもの、十分のものに仕上たらどういふもの、どういふ筆をとる、かういふ筆をとる、筆にしるしてくれにやならん、ことばでさとしてもどうもならん、十分ししたら、一つ〜をさめてくれにやならん、筆にしるしたとて、どうもならん、皆勝手の理をこしらへる、なにをおもふてもこの道、神一條の道、どんな事もたて、みせる、

これからどんな事も神はおほめにみてゐる、神といふもの、そんなちいさい心でない、世界中子供をよせあふてこれもいかん、あれもいかん、ちよいとくをさめかけ、世界さとしかけ、あらくの道、二三年ぜんまでは一寸も分らないだ、あちら高い處くこゑをかけ、ようにでなかつた、二分通りのぼりたら、こけてゆく、二分どほりしんぼうようせず、しらんともいへようまい、今日の日みてゐる、神一條の道で、神一條のことばでできたもの、はようから仕込である、どんな事もこんな事もわからん事情またかはる、だいのかはるやうなもの、だいかはり根がどうもむつかしいてならん、ほどようつれて二分通り行くいとまりて、三分一分のところむつかしい、一寸とひろめかけ、三分たちたら、七分はすぐにをさめる、もう一分

むつかしい、何ぼさとした神のさしづ、みんなあちらへうつる、こちらへうつる、かつてのわるいさしづはうづもつて、こんな事では一分の日むつかしいなる、せまつてくる、このせまつてくるはどういふ順序の理、さとさりようか、おほくの中、たのしみくいふ理がなからできたものであらう、よういならん道、よくをはなれてでてくる、なんとおもふてゐる、日々あらためてゐる、たねといふ理をもつて、はなしかけ、たねは元である、口上手辯が達者やといふてもなんにもならん、日々取あつかひ本部員くといふは、神がつけたものか、これ一つあらためてくれ、さういふ理は人間こゝろでつけたみち、世界は人間の道、此やしき人間心でとほる事できん、神の理それだけむつかしい、どこへ行つてもむりといふ理はない、神が理を

をさめかけたる、世上どういふ理もつて、なんでもかでもをさめてかゝる、此順序き、わけくれにやならん、どこでまねをしたとてならん、どこでみせをはつたとてどうもならん、元がな
いから、此やしき元なる地場といふたる、其元へはいり、神一條の理をもつてくれ、十本のせいを揃へ、十本の中からだん
く順序ある、双方の日をかさねにやならん、日をかさね、恩をかさねてどうもならん、年限かさね、年限くもりなりにとほれば、十本のくいをうつたも同じ事、長い短いわからねばわからねばわからん處は、なんべんでもとひかやせく、一つもとひかやさず、長い短いとひかやせとくいふに、もうよろしいといふから、神がひいてしもふた、それから會議くといふたて、人間さしづをこしらへ、取次みぐるしい、ごもくだらけ、

一寸く日々つもれば山となる、この山となつたらどうするかこの順序き、わけできねば、人間心とほるだけとほりてみればよい。

△しばらくして

さあくこんやくは、十分ときかして、すて、みたり、なでてみたり、親がでて此はなし、なんとおもふてきて居る、十分みえて一つのくゐき、どつからどういふ事になるか、どういふ事もさとして、しらずしらずにゐてはどうもならん、ほんにいまのもの、年限もきたら、日々の處をさまり、代もかはり、二代三代をさまるやうになる、一代でくはしいことわかりやせん、よせあふた中、十人の中、ことば一度にださりやせん、おうそふじや、この順序みにくい、此理にとゞまる、ほんにさう

であつたか、ほんにさうと、尋ねてくれればよし、この道の順序
定めてくれねば、たのまるまで、これ一つさとしおく。

△一二三の理を尋る

さあ〜一寸咄した〜、中にて一、二、三、中に取まぜて咄
し、一二三わからん、まだわからんぐらゐはだいたいない、わけ
て一時順序はこぶ、心に日々くむ理なくどうりからの理、その
中にきくにきかれん、みるにみられん、高い低い理、長い短い
理、よう聞分、神のさしづをきいて、わからん事を聞分、どう
もならん、なんぼさとしたとて、かつてある、よいとわるい
と、長い短、ほんにこれでこそ、神のはなし、さしづ通りより
ならんものと定め、春以來順序一てんのてんをかけ、やつはり
どうもならん、どうやかうや、しらず〜はこびかける處、人

間心ざんねん、だいといふこれがだん〜にきこえ〜て中に
かうやといふ、そふやほしになつてしもふてはならん、一時一
つの心ならん處から、だん〜さとしかけたる、さしづ通りす
れば、おほきのこゑで、どうやかうやときいてみぐるしいか
ら、そんなやしきであらうまい、めん〜心に一つなるほど、
いふ日から、つれてかへつてる、なるほどの理に、だん〜く
べつ〜、このやしきはないほどに、よういたいていの事にな
い、ようき、わけ、あの人めん〜たよりもつたなら、重々の
理をたのしみ、理をつもりおそろしや、たゞ一つだいである、
ぜん〜本部長〜といふてゐる、これもだん〜ある、本部
員〜何人ある、本部長といふものは、神からいふたのか、人
間がいふたのである、人数初めかけとよせてある、これから一

つかんがへてみよ、おもてならびく、たかいひくいもながい
 みじかいも、わかるのであるく、わが事した事は、みな人の事
 とおもたらあきやせん、わが事とおもたら、わが事になる、人
 の事とおもたら、人のことになつてしもふ、どれだけいんねん
 じや、いんねんといふても、はくいんねんもある、あくいんね
 んもある、よう聞分、なんぼ本部員第一のそらにゐたものであ
 る、しもからならんく、此理みなそれく、さんらんして心
 をはかつてみよ、かみにとまつても、あしもつてけつてしもた
 ら、ころく、と行つてしもうた、かはいそふなものや、それじ
 やから本部員じやといふ、あちらへ理をかけ、こちらへ理をか
 け、かけさがしの順序、道とはいはんほどに、これをよう聞分
 てくれく。

△飯降様建物十月一日(一本政甚様とあり)

さあく尋事情く、一寸かりことばそへから一つの理をだし
 たる、ふしんは願通りの普請、順序といふさとしある、かゝる
 までにさとしおく、三軒といふたちや、三軒この順序あざやか
 わからん、三軒むねをならべる、二軒たつた、あと一軒かいな
 あといふ、ふしん初めかけか、りかけ、か、りかけたら、あと
 へはもどさん、ゆつくり尋て三軒むねをならべる、二軒だけ
 た、もう一軒なあとおもふ、これでたてをさめやで、三軒ある
 のや、しゆんをみて名をつける、三軒の理がある、あざやかわ
 からにや、聞たらわかる、一通りの理から尋ねたらわからん、
 いつの理になつてもわからん、か、りおや子もろともく、ふせ
 こんだ理、親子もろとも理、むね三軒の理、じつさいわから

ん、大工といふはなんとおもてる、おもて大工にうらかぢや、此理聞分、三軒たちならんだ、ようしやんしてみよ、何年いぜんから、食物つくりた田地や、世上からふしぎにおもはにやわからん、この草ばへの中に、かういふものがたつ、うらはかぢや表大工とさとしかけたる、順序の理から聞分、三軒ならんでたてたをさめやで、いさんでか、れば、いさんではたらく、かゝりの日はいふやうにしてくれ、聞ようとりようでまちがふから、どうもならん、十のものなら七つといひたいが、三分よりわからん、むさくろしい處では、きれいなしごとでけん、よう聞分てくれにやならん。

△おして三軒の建家はこれですむのでございますか

さあ〜三軒〜、これでをさめふしんやで、かりやかりや、

いくのいくたび、たてかはらんでも、理はおなじこと、此理をはずしたら、神にむかふも同じこと、三軒三軒理さへをさめたらそれでよい、年限刻限であざやかわけ〜、三軒の中のもの、たれかれのものでもない同じ理。

△明治三十一年十月一日前日刻限の御指圖本部員

〜事情押て御願

さあ〜本部員といふは、世上の理をいふ、ないしん一つ、神一條の理、神の理から一つの理いたゞかにやならん、これまでの處、いくへの日も、どうもならぬ事情もある、こすにこされん一時順序、名をかへる、事情とほりて事情あざやかといえん、それ〜の日、それは順序の理、世上の道に一つの理、おほいの理、おそくはやく、ぜんとおそいとみわけてくれにやな

らん、ぜんとおそいとまちがふ、今一時さとしだしてある、この順序、おまへも一尺なら、わしも一尺、一尺通りなら、おなしことじやなあ、ながいみじかい、たれにこいといふてもまたみちじやなし、神のさしづゝに、高い低い、此理むさくろしい、順序の日をしらす事でけんまでや、一日かとおもへば二日、二日とおもへば三日、なんでそんなたのしみの日を一日おくりくらす、どれだけやりたいといとまよから、あのものかしこい、べんがたつしやといふても、けふ日ごのさいはいでけやせん、年限のたねがあつて理といふ、何名の本部員ふへた、あれも一尺やら、三寸やら、五寸やら、わからせん、一尺のものはぜんから一尺、ほんにさうであつたかいなあ、めん／＼ちがふであつた、互互しんせつの理をはこべは、席十分いさんで、

席一日の日もやすます事はない、席がやすむやない、席をやすますのや、なんぼういふてもき、わけでけん、いつかやすむ、世上きいてがつてんゆかん、なんであらうといふ、あれつぶさうか、こかさうか、人間よりあふてわからず、十日二十日やすます、席が初まらん、悪風の手傳してゐるやうなものである。

△押て農行役も一しよですか

さあ／＼さういふ處、心はこんではどうもならん、今日まいて、きよ用木になるか、世上からかしこいものや、べんしやといふても、やとひいれる事できんから、ようき、わけ、どうも日々處である、それなら上も下もない、上下中の區あきなくてはわからん、道具／＼、日々つこふ道具、大切なる道具もあれば、あたへたんとだした道具もある、たねをまいたる年限から

用木といふ、ささうといふてできるものやない、しやうといふてさせるものやない、一時どんな事もできるものやない、この順序しつかり聞分てくれ。

△押て

さあ〜あらく〜の處、あらく〜のきまりでよい、本部員といふたる、教會の理、神一條の理とはいへん、世界の理、その中へ本部員かすこの一つの理あざやかわからにやならん、それ〜中といふ、うもれたるもの、新らしいと思ふたら、ころつとちがふ、道の理はなしあふて、互〜できるかできんか、みんなこれだけなんぼいふてもどうもならん、とんとどうもならん、これまでの處、みわけてくれよ、ききわけてくれよと、言ふてあつても、き、わけてくれん、はたらくもの清水なら、神

がはたらく事できよう。

さあ〜あらく〜つくしたものだしてある〜、昨年以來だしてある、くあきの理はかるやう、くあきの理ほどむさくろしい理はない、言ふても〜わかりがたない、どうもならん、いくめいなん人、三四人してをさめきた、萬事の處、とめおきたる帳をけして、はじめかけてくれ、改めて順序、改めてくれと、さしづしよう。

△押て政甚様の件

さあ〜尋處〜、政甚、あれはみな日の中にどうしてかうして、あれは順序までのもの、あれだけのもの、さきになつたらわかる〜、おもふやうあればしまつてどうかう、これはいらん、わかいからせいだして、ようをさせるがよい、今すぐなに

やくといふて名をつけるやない、ぜんくかうといふ、をる處何やくとらいでもだんない、する順序わからねばなんべんも同じこと、けふひそかのさしづで筆にとらしてもらふた、これもちがふた、席順、席何時なりとさあといふたらよしといふ、なんともいふやしまい、けつこうにくらしてゐれば、きま、にくらしたいものや、これを聞分たらわかるである、高い低いはやいおそいの理わかりたか、高い低い長い短い、この理わからねばおなじ事、高い低い一寸まだくわかりにくい、今日はいりた、きのふはいりた、あらずふ理が高い低いくみきわからねば、何べんもおなじこと、こふがありやこそ、それくみのさわりから尋る、かうなるく、もうながの處、心を定めておひくたすけてもろた、なんにんあるやらしれん、この理よう取

らねばわからん。

さあく本部員といふ、一つの理、あらくの理、これまで理とほりきたる、本部員の中でも人間心おいらがかうといふたらかう、相だんの理、いろくつごう、あと一つもれたもの引出し、うもれてあるもの、新らしいものはない、とりあつかひぶりは同じ理わかつてある、遠い處のみちをあゆんで被下、十分取あつかはにやならん理は一つ、同じ事といへど、つまる理同じこと、あちらこちら、どうも何人に聞てもおなじ、一つの理にさとさにやならん、日々はこぶ處、たれそれこの理これだけ、また新らしいものはいれてない、ふるいものもおなじこと、一尺一尺となら、へだてといふは、さらにできようまい。

△明治三十一年十月一日平野とら身上御願

さあ〜尋る事情〜、どうも身上こゝろえん、どういふ事である、さあ〜いかな順序あら〜といふ、どういふ事も願通りにさしてある、身上に一つこれでなあとおもふ處、みな〜それ〜心の順序さとする理をもつてみよ、あら〜あちらこちら萬事の處、なか〜通りにくい理、通りにくい順序き、わけ、どんな事もおもふてできてきた、みんなこれおもふだけみえる、めん〜それ〜ながい道すじ、ながい間どんな理もあつて通りた、みちは話のたね順序心もつかはずおくらにやならうまい、あともたのしみねんげんたのします、しゆんといふ一日の日をもつてかうといふ、さしづそこへ〜みんなへやれ〜たのむ、たんのふの理これからといふて、一寸〜これま

でにほひばなししてある、これ一つ一日やない、三日十日道の理をもつてたのしむといふ、それ〜たのしみある心といふ。

△おして

さあ〜尋る事情〜、六分でない、七分までもこちらへ、六分七分はにほひの間、これから三分の心七分のだい、これだけさとしおかう。

△明治三十一年十月十四日東分教會治め方に付山澤

永尾出張中の處歸りて御願

さあ〜だん〜事情〜、尋る〜いくへ尋る、だん〜尋る〜事情この事情どちらどうともいへん、さき〜いへん、どうもならん、事情かさなる時々順序にもさとしたる、長い一寸年限四五年なんともきくにきかれん道をとほり、今日一

時大へんどうせにやならん、かうせにやならんもうさとすにさとする理はない、なれどもたゞ一つ道のをさまる理、治まる理はない、道のないみちをつけたるよういなる事情でない、尋る一寸順序はじめ、順序の理がある、世界の元に順序理がなかつて一人一つがけみちつるぎの中とほりぬけたるやう一つわかる、世上なんと一つかたきの順序道をとほり、やうくといふ、このみちあちらこちらの道をこしらへ、道のさびといふ、くもりよういにはれん、始め一つだいはじめ、將來末代の中くもりつき、ふみかぶりく一つの心からつけた道じやない、人のつけたみちはいつまでもとほるにとほられん、世上はまんすじの道、まだかりのみち、このみち一すじのみち、もとく一つにあゆみく、まちがひ重々とりちがひあつて一つさんげ、

一つの理みちのをさめかす二三年かふたがひかう三點の中一つもゆるすといふ理はない、兄といふ理にさとし、ほんにいま、でまちがつてあつた、かるいとおもふ理がおもい、たんせいつくせどき、やうとりやうでまちがふ、みないちれつ世界元もこななき、その一つ心をみわけ、ほんにさうざうの心をさまらねば、なんべんでもおなじ事、これ一つさとしおく。

△おして願

さあく尋ねかやす處、どうで一つさきくの處、一つ元といふ、元からさとする、兄親にきかす道理、他にさとしてもなにをぬかすといふやうなもの、そのあひいづれの日でてきたら、兄親もう一つ親がある、この道理あるほんに元かいなあとわかる。

△しばらくして

さあ〜だん〜しやん、幾へしやん道理なにほど兄親といふ、かる〜しいもの、人間の心神の事情の心つかふ、二つ中の心、一寸わからん、をさまりとりにくい、よい事できんどれだけいんねん〜でも、どうもならん、はくいん〜理がわからん、心のつかひかたどうもいかん、のちのためどうもならん日がで、からどうもならん、とりかへしできん、この順序よりをさとして神のみちである。

△明治三十一年十月十四日山澤永尾二名東分教會の

整理上に付三點の申込有之に付御願

さあ〜だん〜事情〜、尋る〜いくへ尋る、だん〜尋る事情、この事情どちらどうともいへん、さき〜いへん、ど

うもならん事情かさなる、時〜順序にもさとしたる、長い年限四五年の間、なんとも聞くにきかれん道を通りた、けふ一時大變事情どうせにやならんかうせにやならん、もう〜さとすにさとす理はないなれど、たゞ一つ道のをさまる理より治める理はない、道のない道をつけたるやうい事情ではない、尋るから一寸順序の理をさとそ、此道といふ世界元々ない處よりたつた一人、がけ道つるぎの中とふりぬけたる、世上かたきの中、誠一つの理を以て道をとほり、やう〜といふこの道である、なれどめん〜心の理よりあちらこちらの道をこしらへるから道のさびといふ、くもりともいふ、このさびくもりは一寸にははれん、はじめた一つだといふ、生涯まつ代のだいの中にさびがつきくもりができ、ふみかぶり〜一つの心からけふ

の事情といふ、人間の心でつけた道やない、人のつけた道はいつまでもとほるにとほられん、世上は萬筋のみちまたがりのみち、この道はたつた一筋のみちを一すじにとほれば何もいふ事はない、歩みちがい重々とりちがひあつてはさんげ一つの理が道の治まりといふ、二三年の間かうたがひかうといふ三てんの中、一つもゆるすといふ理はない、兄親といふ理にさとし、ほんに今まではまちがふてあつたかへと、しんじつ心に理をさめねばならん、かるいとおもふ理がおもい、何程たんせいつくせど、聞ようとりようでまちがふ、みな一れつ世界元もなき處から、たつた一人教祖といふおやといふその理よりみわけき、わけして、ほんにさうといふしんの心をさまらねば、なんべんでも同じ事、これ一つさとしおく。

△おして御願

さあ〜尋かやす處、どうで一つさき〜の處、一つ元といふ、元からさとする、兄親にきかす道理を、他にさとしてもそらなにをぬかすといふやうなもの、そのあひいづれ〜の日がきたら、兄親もう一つの親がある、この道理を聞わけば、ほんに元かいなあとわかる。

△しばらくして

さあ〜だん〜しやん、いくへのしやん、道理何程兄親といふ、人間の心と神の道の心と二つつかふ、二つの中の心一寸わからん、をさまりにくい、ようき、わけ、どれだけのいんねんでも心の理によりてはどうもならん、はくいんねん、なにほどはくいんねんでも、どうもならん、心のつかひかたこれはどう

もならん、此理をしつかり聞分ねば取かへしのできん事になればどうもならん、一つ二つのひながたもあらう、他のしつさくはかるいものなれど、おもい處のしつさくは一つ二つ理がまはつてくる、けす事できん、この順序をさとして神のみちである。

△明治三十一年十月十六日東分教會副會長加藤新兵

衛辭職願ひ

さあ〜尋る事情〜だん〜一つ事の始まり、一つの事情たいへんなる事情になつて世上からみても、あらどういふものぞと人に一つの理をおもはれ、中にだんだん事情かさなる處ようき、わけ、だん〜わるい心ではいたりたものはない、月々の理年のしやん、おもひ〜の理がまちがひかさなり、とんとどう

もならん事情になりたる、何かの處元といふか、りといふ、元々か、りの心になつてよき事の理はのこし、あしきはたがひ〜心のはつさん、この一つの理より始めかけ、これからといふはどんなものこんなもの事情に高い低いの理をもつてはならん、おぼれてゐるものも、うづもれてゐるものでも、つれにやならん、くわきつける理は神の理にはすつきりはずれたる、元一日の日をもつてはいりた時の心生涯の理かわらねば何もいふ事はない、月々年々の事情、たがひ〜はなしあひかたりあひ、心のはずさんこの理はさんげともいふ。

△押て加藤氏辭職聞届てよろしきや

さあ〜にん心をもう二度二度はこんで、そこでもといへば又その時の事情といふ。

△同日永尾氏本日出立の願

さあ〜尋る事情、治めかけた事情はなんでもかでも治めてやらにやならん、こはいおそろしいといふやうな事情でも、神一條の理よりをさまらにやならん、みなけつかふとおもふならこそ、處々たのしみの道のなりたる、たのしみの中に事情ありてはならん。

△明治三十一年十月十九日榊井きく身上御願（七十

四歳）

さあ〜尋る事情〜、身上事情尋る事情、人一つの事情は何も思事ない〜、よう一つ事情身上から事情一つ尋る、さあ〜一時どうといふ事ない、年がとり一時どうといふ事身上事情が成てから内々心得んといふまでの理、親といふもう一人の

親といふ理はたいせつ、さあ〜順序はなすによつてようき、わけねばならん、さあ〜親といふ二代なる子といふを、ぜん〜から一つどうやかうやたのしんである、よいか一日なり共休息場へで、樂しますがい、二代一つの理と始め、順序の理を夫々皆々の中かふといふことをさまる、ほんにさうやといふ親大切なる理である、此順序のだいの順序の理をよくき、わけねばならん、この一つの事情をよくき、わけ、一つの理たのします、又中にも二代一つの勤め方はさあ〜どういふものか、ういふもの一つ、どうとかはる事はない、心得の理とさとしおかう。

△明治三十一年十月十九日榊井氏係り郡山分教會と

島ヶ原支教會との事情に付郡山より願

さあ〜かゝりの理がある、人がかはりては席順わからん、よ
うき、わけねばならんで、あちらにもこちらにも一事大事件お
ほいに理がちがふからである、道は一つ教はどうやかうや只一
つの理より理はない、内にみなそれ〜誠の道が通らぬからで
ある、一つの理道は實より外にない、誠の道がとほればあぶな
い事はない、誠の道をとほりてきたならかれこれはない、此理
をようをさめたら何かの事もさまるである。

△明治三十一年十月二十三日御本席様御身上願

さあ〜尋る〜、尋事情、何度〜の理を、みんなそれ〜
から身上から尋る、みんな一つ〜さとする、取次一つ、心を
あらため、そろへかはらん一つの理をそろへ、こしらへなら、
是まで前々さとしたる〜、さとしても〜、取りよう〜理

をこしらへる、けふの日〜、一時〜しらべてみ、ほんにな
るほど〜、心で改心の理をそろへてくれ〜、中に幾名何人
ありても、一名もおちのないやうにそろへてくれにやならん、
席の事情、一日二日三日、またしてもおくれる、五日十日三十
日、どうもことばるにことはらんやうになる、わからねば何時
どういふ理もさとしたる、席順序取次の日々働き、働かさして
ある理、あなじようもちあひの理で、あと一つの理、これまで
の中にさとす、取次十人あるが、おんなじ一つの理にむすびこ
む、みなそれ〜、取次〜、席一つの順序理、三名の理をも
つて、改めた順序の理がある、さしづからでけた順序の理、さ
しづまもる、まもりぞこなひといふ理いらん、まもる中に取次
三人、筆取一人、順序の理、筆取三人ゆるしたる、とりませの

せきをつとめてはどうもならん、けふはおまへ〜きしり、此理がわからねば、つよいものがちも同じことやで、この道はつよいもんがちではいかんで。

さあ〜みんな一つ、つよいところはつよう、おれる處はおれにやなるまい、一日おくりおくる地ば、なにほどふるいといふ、だん〜さとしてある、一つのくるいはせかい〜、でけたらどんな事になる、取次〜、これよう聞分、取次の一つの理にだん〜あつては、取次とはいへん、神のとりつぎ、順序まこと、人はどふでもいふやうではむさくろしい〜、ちりだらけ、ほこりだらけで、どうもでけやせん。

さあ〜かうして咄しする、席に身上、おなあ一日はあすいなあ、思ひ〜一日二日三日、おくれる〜ものや、今一時、二

日三日はまんぞくあたへられる、五日十日二十日まんぞくさしにくい、日々はたらき、あざやかならんから、是までつたへたる、長い短い、これが一つの理、おまへも一尺ならわしも一尺、たい何人あれど一尺、咄しの中にどういふ理でてがらにはどうもならん、世界にはちるをみがき、めをつけて、耳をほつて、まつてゐる、十人なら十人揃ば、神が働〜、こむさい中では、世上一つのあく風の理となりやせんか、かうして一時、これでとめる、尋たら席が三四日やすむ、席にあきらかさとす、席はなんにもしらん、かう〜した順序、まんぞく心にあたへてくれにやならん。

△明治三十一年十月二十五日郡山一件

さあ〜尋事情は、どうもよぎなく事上尋る、さしづかず〜

いはん、どうしたらいかん、かうしたらいかん、いふにいへん、むつかしい、事じやが、どうもこれをさまるにをさまらん理ないもの、道といふ、理といふがをさまらねば、道の理はなきもの、道といふ理がみなでた、道をはすせばどうもならん、何時どういふ理、一寸にはわかりがたない、是まで遠く咄しやな、みんなぜんく、さとしたる、どうて一つといふ道がある、なんであ、いふ事になつたやろ、一つのこと、ろといふ、道といふ、心から道、道から心、どれからか、らう、途中から道をふみまちがふたやうなもの、順序理どちらどう、こちらかういふたて、きかん理さとしたて、どうもならん、道といふ、心といふ理があつて、心と心とあへばなりたつ、あはねばはなればなれのもの、今日に今日、教理が心にあれどもうつとしいも

の、人間心の理、一つの道を通れば道といふ、かはいといふ、たすけにやならん、そだてる道からをさめるならをさまる、世界一つの道理、なんぼいふてもきかん、いつくまでもそんなことはない、をさまつた一つの理がなげにやならん、なんぼ日たつても、初めた理から、初めた心を以てすれば、治らにやならん、一時の處、いくいかん、こんなさしづといふものは、くだししようがない。

△押て

さあ、まあどうもならん、いろく、の咄し、いろく、ばんじ、だんく、の上から、だんく、どうしてかうして、みんなしてゐるなかの、當分一つの心さへのいたら、一時にどうといふ事、これはい、んで、さあ、長らへて、あちらへこち

らへ、どうがよかる、かうがよかる、中にほつとしやん、みなまんぞくさしてくれ、是までの處、あちらもよろこばし、こちらもよろこばし、是でなるほど一つの順序、一つの心、なにかのさしづでけるかでけんか、き、わけてくれ。

△明治三十一年十月二十六日榊井安松身上願

さあ〜尋事情〜、いかな事情も、尋ねにやわからん、ぜん〜一つ、ようこそ尋たなあとさとしたる、をさまれば身上をさまる、ふるいところの理、一日なりとたのします〜、これ一つ、あとは一つ、たへられんといふである、一時一つ事情、あと一つ、小人といふ、だん〜事上、内々の事情であるか、道の事情であるかわからん、尋るわかるやうにさとす、みな双方の理もわかる、よう聞分、長いはなしにつたへおく、年限の

間、それ〜みんな、日々順序の道かんがへしやんしてみよ、ふじん會の理、ふじん會を始めかけた、これはめん〜、一つおもへば一時どうなる、事情の道といへばたのしみ、身上はらく〜といふて、長らへての道、長らへてのくるしみ、まだや〜年限よほど身をくるしんで、年限長い間、どうなるしらくとおもふた日もある、さしづにもとづいて日をおくり、らく〜とつかはしてもらうた、日に取次でる中である、また一時かゝる〜、身上にかゝる、さしづに順序、中に何名とりつぎ、何名中何人此理を取調て、こゝろにかんしんの理ををさめにやならん、この道どういふ事からなつた、おとこおんな隔てない、一つのだいにして始めかけた、この理がこんとわかりがたないこの道の初めた教祖一代の處は女、あと席はおとこ、男

女のへだてであるかないか、この順序の理、日々取次、男女の隔てない、けふはいりあすはいるやうなものには、どうせいかうせいへようまい、道なき理はあらうまい、むりにはいらうとおもふても、はいられるものでなし、いれやうとおもふても、いれられるものやない、へだてる理はなきもの、とりようき、ようの理、また一時の理、またわかりがたない、めんくさへかうといへばかう、たれがかうといふものはない、よつつき、わけ、心また一つの理がをさまらねば、尋ねかやすがよい、ほんにかうとめんくからかうすればみんな心をよせてくれる、はいつて長らくの道らい一ぱ日々とりつぎの中、こゝらからさうだんせにやならん、そうだんすれば、かうくいはねばならん、めんくからかうすれば、それはいかんといふものはある

まい、上から下をそだてにやならん、一日でもはやくはいりたものは、そだてる理がなくばき、ながし、おもひちがいなら、そだてにやならん、おもひちがひく、これからきれいなじゆんき、とつてくれにやならん、上の理よつてき、とつてくれにやならん。

△押て願おことさん

さあく尋る處く、まあ年とれたものく、そりや今一時のところ、ならんといふやない、今かはりく、かはりばんく、それはならんとはいはん、休息所く、けつこうく、當分の一つの當番、當分の順序、もうほどなう日がうつる、どういふやくは、どういふやく、ほどなう教祖存命順序、たのしみうつつて、一つの理またほとなうかはつて一つたのしんでく

れにやならん。

さあ〜まだ〜順序さとする、かき取〜の理、筆にしるしたる、書取の理せいしよ、かういふ理のさとしてあつた、どういふ事やら、こたへがなくならん、どうも道理の道があざやかならん〜、日々よりくる中に、取次何人あるか、人数あらためてみよ、何人あつても、ではたらいてゐるものもある、順序かはりてはたらいてをる、そんならすつきりそろふは、年分なんぼうもない、大祭といへばみなそろふ、あひだはようがある、中によろき、とつてくれにやわからん、日々別席みんなさとする、中にどういふ事さとするものもあれば、かういふ事さとするものもある、まだ一事は定めがあつて定めない、日々取次、別席いはにやならん理、いはずいはいでもよい事いふ、は

やくとりそろへて、一つ順序といふ。

△教長様へ別席の順序願

さあ〜別席といふもの、これ初た時から、理をもつて初めた、最初一席三名、だん〜はじめかけ、取次三人、かき取一人、筆は三人にまでゆるしてある、取次どうもならん、おもひ〜かつてをいふ理がありてはかけてしまふ、近い處なにほどの事がある、遠い處より席といふて教へ、一つたのしんでく、さき〜信徒心をそろへてくる、たいていやない、みんなそろふてくる中に、かぞへられん、それ〜こ、ろをはこんで、つれもどる理をさめてくる、日々席さして、遠く處をもどりてくる、さかえる元といふ、さかえる順序の理、取次からはじめる、取次人をあらため〜、何人の中に何人ある、席一

日おくれる、二日おくれる、中に一つおもひやらにやならん、とく別何席、十分はこぼしてある、中に一つの心に理をおもひやらにやならん、くべつかげへだてあつては、そもくといふ、遠く中を連歸りてそもくではうつしにくい、一日に何席するといふ、なるほどくといふ理がをさまる、けふは何する、道の理をさすとす、道具にたとへてはなす、いるものによつてちがふ、道具をもつてゐてどふもならん、よまいさしづだいととりやうといふき、よとゆうせいしよして、此の理があつたといへば、一にとゞげにやならん、めんくばかり道理をさめるのはしにくふてならん、心の理をつみたて、はどうもならん、年中に席のやすむ日は、何日あるか、何時でもつとめさしてある、席がなくては、まん足あたへられようまい、よぎなく

席がやすまにやならんやうになる。

さあくかうしてはなしかけたら、むねにはまるで、めんくがつてん行まで、尋るかやし、一時でも、二時でも、神はひかんでく。

△押て

さあく尋處の理がをさまればさとししよう、取次何人ある、日々たのしんでこそ取次く、みなそもそも、一日やすみ、三日になり、あざやかならん、くるしいからや、何人別席、屋敷何人ある、役員の中、屋敷の中で、けふあすにのぼつて、はこばりやしようまい、みなくの理ではありやしよまい、きのふやけふ、一つはこばしよまい、おなじ一つの理をもつて通れば、同じやうにせにやならん、むさくろしいく。

一寸咄しわかりかけるく、取次一條のはなし、一寸咄しわかりかけた、とりつき同じ同かく同やう、同かくはづれて、同じ理とはいはさんくく。

△押て

さあくわかつたかく女といふてならん、女はいれてない、けふからはいりてつとまらんものは、同かくとはいはん、同かく同様のつかひであるく。

△押て

さあく道理をもつて咄しかけるから、道理をさとす、まんぞくといふ理をしらんから、此理わからん、此理がわからねば、何名何人のうち、はずれのやうなもの、けふはよぎなくどうもならん、よぎなくつとまるか、つとまらんか、まんぞくといふ

理わかりたか、わかりたら、わかりたといへ。

さあもう一こゑく、どういふ理をはなしする、身上から事上尋る、かういふさしづあつたとて、みんなそれくの中から、どこにどういふ理あるまいかもしれん、世界身上からよせる、たのしみなかくの理、たゞ一つのなんでもなきものなら、たゞけふの理をさとす、又一つふかきくのさとする、たのしみ一つの理であると、順序一つの理を、さしづしておく。

△明治三十一年十月二十六日南海分教會長山田作二

郎氏役員一同山田氏小人及教會治め方事情願

さあく尋事情く、いかな事情みの事情、みといふみから事情尋る、我身みから尋る、尋ねば双方の中の理をさとする、心といふ理をしづめてしつかり聞とれ、此道といふ、遠い處それ

くつたふ心は日々受取、中にだんく事情一つ、あちら事情こちら事情あつては心にたのしみない、心にすんだ理がたのしみ、中に一つ心と心の理があつてはたのしみあらうまい、双方の中へさとす、一時尋る處身上から事情尋る、おもひくゝの理を尋る、双方の中の人と人との事情おほきい理といふはみんな理は双方あひもち、あひもちの理がなくてはどうもならん、一日の日もかはらず心にもつて日々たのしみ、あひもちなくはくるしみや、遠い處あちらへあよびこちらへあよび、なかゝである、いつたいなにをしたやろ、年限の中かゞの理あつたやろ、心といふいつくまでなら末代の理、末代よういならん理である、いつくゝの理末代の理に一つこふしてみんな中に一日の日尋る、どういふはなしがある、どういふ理がある、お

もいゝの理である、これまでといふものは道のかゝり、どんな事おもふてもおもやうにいくもあればいかんものもある、をさまつてどうなりかうなりだいがでけたやうなもの、これまで順序の理はせかい教へ、一つはなし、一つ此理より外はない、道の理一つこれよりたのしむ理はない、一日の日よりおもいたつたる將來の理たのしみ、人間いろゝおもふくゝ、とりなほしすれば元々の理とおなじ事、將來末代の理といふ、みんなそらふてかうといへばかう、いひやうとりやうさとしやうでわかりがたない、此理聞わけ、會長といふ會長ありて下、下ありて會長、おれといふがといふ理はそはんによつて、此順序かをさめるならみんなをさまるで。

△明治三十一年十一月四日増野氏以押て願て身上せ

き出に付

さあ〜尋る〜、尋ねにやならん、さあこれまでの處、身上
 さわりから尋ねるやらう〜、第一かないながらへてさわり、
 この一つ事情は萬事こもりある、中に事情おほせいといふたぶ
 んといふは同じ事、中一つ日〜の處この處き、わけ、ようき
 、わけにやわかりがたないで、この事情聞分、處は理がありて
 わからん、わかりてわからん、わかりてわからんといふはどう
 いふ理、是迄いくへ順序さとしたる、このごろ是であらうか
 く〜、一寸定まりかけたる、ようき、わけ、尋ねだん〜あ
 る、身上さわりだん〜ある、尋ねるとて萬事さとしたとてな
 るほど〜といふ、いづれおよばす、日〜順序き、わけばど

うかわかる、たれかれなつといひつけば自由なるかならんか
 き、わけ、どうせいかうせいこれはいへようまい。

身の處か、りて又それ〜だん〜すればよせる〜、まあ
 く〜なか〜のさとしそこでこれからさしづ理にたがはさん
 く〜、この處でさとしてゐるのに世上にどういふ理になつた
 ら、どのくらゐくるうかわからん、ようき、わけ、日〜の處
 みなまんぞくさ、にやならん〜、たのしみなうては日々たよ
 りない、めん〜き、わけ、子供小人あたへ〜たのしみき、
 わけ、めん〜理とはた〜同じ事、まんぞく第一、まんぞく
 なくては日々つかへにくい〜、よろこぶ理になりたら日々し
 んほいない、これまでたつだけは一寸た、にやならん、この理
 だけ一寸かうたつ理はあたりまへ、た、ん理はさしづからたて

るは理である、この理一手一つの理、元一つ理、その理世界
 くはいふまで、先々これまでよほど年限たつてある、年限と
 ほりたる事情。

△しきりて御はなし

これから順序さとするようき、わけ、またく大くわん道とはか
 ならずおもはれんおもはれん、やうどうりさとす、どういふ處
 から道つける、道をさらへてつける、まあ世界どこからどこま
 で今日なつたる道やない、おつとりはんぶんでけたるく、き
 、わけ、ぜへたくしてゐては道つけられんき、わけ、わらじは
 いてだんくはこびおもくつんでこそ、理がきく、所くどこ
 からどこまで教會なつたげなあくいふばかりではならん、こ
 の道世界道であるから通りにくい、つけにくい、ようき、わ

け、これ一代の處にはあらくどうりさとし、又あらくそこ
 へくつけ、處名稱たよる所あちらこちらほんのしるしうつた
 だけ一寸にいかん、しるしうつた理はあとにもないさきにもな
 い、帳はじめしたようなもの、帳始めは効能の理である、この
 理さとしたらみなわかるやらう。

△押て始めと仰せ被下は最初名稱の會長の事でありま

すか御願

さあくこれようき、わけ、それくしんといふ、そのしんい
 く名何人かはり、始めは帳始めのやうなもの、けそにもけされ
 ん、始め一寸てんうつたものは將來の理これはかはらせん。

△又おして御本席様御扱方三名の處、筆元は三名の

外でありますか、又筆取は三名の内でありますか

御願

さあ〜尋る處〜、事情によつてどんな事もある、尋ね事情にもある、話し一つの理によつてあと〜長い理もある、そこでかういふ理である、さき尋ねて何人かきとりといふ事、席よりさとす、日處々はの三名〜、この三名〜、この三名みなそふたる、又三名は理をか、んやうはずさんやうき、わけ、一日〜たゞ席はこぶは三名、其の中ならんといふは又ほんの一つによせて又か、らにやならん、中に日々はこび方三名の理をもつてはこばにやならん。

△又押て事情に依て筆取三名の處、本部員外の者に

さして貰ひましても宜敷か願

さあ〜筆取そろはん時は、やとひ筆、ふでとりそろはん時は

やとひ筆。

△明治三十一年十一月十三日東分教會の事情につき

あれこれ色々運動者がありまして大變事情出來の

由にて、永尾氏あとに残り被下て、尙山澤氏出張

せよとの事に付、今日より行きます事を御許し被

下か御願

さあ〜尋る事情〜、出こす處はゆるす、治めかた〜どうも心と心とあふたらをさまる、心が合ぬかはるから話しかず〜の中、きく處かずなき處はじめ、兄といふ親と〜年限のうちで相當ものできて、又所〜名稱といふわるいものいかなもの、わるいものとはいはん、兄といふふしようして子もそだてる、親といふふしようしてそだてる、子がまんぞくして親と

いふ、どんな事もならん處、そだてるがおや、親がはらをたて、はどうもならん、これをようき、わけてくれ。

△上原會長が椿氏一人を第一たよりにして、多くの用を一人にさすといふ上からいろく苦情出來ます事もあります

さあくどうり、たゞ一つおやく兄弟して中にどれだけたより、一人の心たに心あつて一人のものがたよりでない、このたよりにでける道、どれからでてきたか、この順序からおやといふ、すてるもおやそだてるも親、おなじ理ならどんな理になるやらしれん、このうつとしい理あきらかにわけてやれ。

△以前椿氏の事をしばらく分教會を離れてもらふやう咄し致しましたが、道の理に間違て有ませんか

さあくようき、わけ、どれだけたより、一人ぐらゐ一人の道理でできるものやない、中年限相應の理から教會といふであらう、なんぼたよりくたよりくならん日もみたやろ、これから順序き、出にやならん、出にやならんが道理の理としてささきにやならん。

△明治三十一年十一月十八日、十六日夜御本席様御

身上腹痛に付、役員一同甘露臺へ一時御願申上し

處速に御全快被下候に付今日改めて御ねがひ

ウン……さあ尋る尋る事情く、身に一つ一寸さわり心得んといふ、それくよりもはこぶ、身の處はこんで一つすみやか、これは萬事事情にさとさんならん、ゆつくりばんじさとしたい、かきとり順序三名の理もそろひ、みんなそれくそろた

上で三名の筆をもつて尋ねてよ、今日はこれだけさとしおく。

△明治三十一年十二月三十日朝九時御本席様御膳御

あがりの節身上げせまり御咄し

さあ〜一寸はなしかける、一寸はなしかける、どういふ理はなしかけるなら、いつ〜のやうにみなそろふて、順序をもつてしらしたい、一日の日まちなねた、なれどみなそろふことでけん、そろへば身上にかゝり、どふも尋ることだけん、これまで事情かさなり〜て、一つの道理といふ理はんぜんといふ理にならん、あちらこちら、みなようきいてくれ、これまではどういふこと、かういふこと、しやんあらためてみよ、かんがへてみよ、どういふことも、いきてゐる間はわからにやならん、最初からの事情はわからんじやない、眞實わからんやうなこと

ではならん、元最初何もわからん、さい〜だん〜、ひきよせた理に理のない道はない、これをつたへにやならん、いそぐ〜、みなばら〜の中、いふたて道理わからん、一寸やすみ中といふ、大祭中、みなたのしんで、くる、親里といふて出てくる戻りてくる中、あんな處といふ、たれは世界の理、遠い道はる〜運ぶ、これは何をつたふて出てくるか、此道理聞分そこで席々、何席運んで、本席といふ、授け貰て戻りたら、是は國のみやげ、國の寶、何ほどやらわからん、この理うつかりおもふてはならん、此の戻りくるものに、どういふこと、皆さいはいどほり扱へ、道理の道にたがはん限り、どういふ道ある、此道の理聞分て、はやく順序治めてくれにやならん、此道にどういふことありたて、あぶない道、どうしたらよからう、

こすにこされん、道ありたて、あんにやならんやうな道、神がつれて通りやこそとほれる、神の道にうたがひはない、うたがひありてならん、我み上にとまりて、高いところにとまりてした目にみる、これしらしたい、なれどこのものそろはん、そろて一時順序き、わけてくれ、たつた一日の日、か、りただけ、みなこ、ろつくすどうり、心運ぶ道理、き、わけばわかる、おほくつれてかへる、一週間の道理き、わけ、どれだけしらんもの、わからんものでも、かげからきいたら、尋るが道理である、どうでもだんない、勝手なら勝手にさす、それで人に満足あたへられるか、あたへられんか聞分、この満足どこから理あたへるか、たれに理があるか、この道理聞分、何ほど高い所にゐても、何時おちるやらわからん、一夜の間にも、ど

ういふことでけるやらわからん、どんなことでけても、神のうらみとはおもうてくれなよ。

△明治三十一年十二月三十一日午前一時刻限咄し

さあ〜はなしかけろ〜、咄しかけるで、みんなそろふてかへつた、さあ〜ふるいもの〜、つれてかへつた〜、いち〜はなしする、どんなこともこんなことも、咄しする、よきいてくれ、よきいてくれ、どんなものも、こんなものも、ふるいもの、つれてかへつた〜、さあ〜ふるいことやけれど〜はなしする、そんなことは年限たてばなんであつたやらこんなことかへ、さういふことであつたかへ、さうやつたか、三十年のうへになるやらう、三十六年いぜんには、先とおもてゐたのに、なんとかへないなあ、そのじぶんはよいとおもてゐ

た、もとくはなあ、どこのぼふずやらわからんものが、かど
 口さしてあばれさつてく、どうしようやしらんとおもたこと
 もあつたなあ、そら六月ころやあつたなあ、其時のごをおも
 へば、夢見たやうなことになつたなあ、えらいことになつたな
 あ、それまでみんなよつてこつて、おもひあふてたてたことあ
 つたなあ、みんなどんないこともあつたなあ、その時のこ
 とおもへば、今日はゑんりようはすることいらん、きがねする
 こといらんで、ふるいことはなしのやうなもの、みなきいて
 ゐるものはよい、きいてゐんものはたよりないやうなもの、け
 れども道はさかんれば、世界さかん、世界さかんといふは、
 元があるからや、元おもへばゑんりよういらんがく、これま
 でまいよく、神のはなしにしてある、してあつても、その時

さうとおもふだけ、さぶいばんもあつたなあ、もうよあけやで
 なあ、鳥がないたこともあつたなあ、さうやつた、とんでもな
 いことあつたなあ、その時どんなことも、とほつてもろたんで
 あつたよつて、きよはゑんりよせんらんこととはない、六月こ
 ろのはなし、ぼうずきよつたのがあらふるいこと、疊へ刀をぬ
 きやつて、ぐさとさしよつたこともあつて、どうしようやな
 あ、かうしようやなあ、その時のこと第一おもふ、わしもおも
 ひちがひしたわい、そこでどうもならん、そんなこと今おもた
 てならんし、わしもついてますく、まあなごうおもひなされ、
 ふるいはなしきいてもらいたい、こんや一寸よつて、一寸あつ
 まつて、一寸はなしすることばかり、かんじおこしてくればよ
 い、かんじねばとてもく、ながいことつとめられん、こんな

こと、こんやそんなこと、まだくよはつたといふとは、かほ
 いろにもだしておくれな、もうわしもでますわい、ふるいく
 はなしするから、みんなすんでくれたらよい、ほんになるほど
 をさまりたらよい、これはいつものことやと、をもてゐては
 どんなしんはいせんならんやしれんで、これだけ一寸はなし、
 さかんく、まぢかね、最初はとうしようにもかうしようにも
 でなけんた、今はどんなことでも、しようとおもへばでける、
 せかいからどんなものでも、くる、三十年あと神のはなし、
 三十年以來どんなもので、きても、あたへるものもない處、大
 工といふてふせたこと三十五年、三十五年いぜんより、つえは
 しらにして、つれてとほりてひらいた道、この理はこれまでと
 いたことはない、家内ふせこんだく、何もしらんものからと

びこんだく、これをさまりたら、席はあのくらあるもの
 か、日々どうせんならん、このはなしあるなれど、身上せま
 り、神の咄しもある、じゆんくふかいはなしする、これをう
 つかりしてはゐられんで、夢にも傳へたる、またさしづにしら
 したる理は、一人限りき、わけ、しやんせにやならん、なか
 くの理であるく、こゝろではどうかうおもてゐて、心でう
 つしたところが、しんのこゝろに治まらにや、あんしんならん
 ところある、どれだけのことしたて、あんしんことば一つの理
 でなりてくる、理き、わけ、さいしよはもうく、さぶさ
 く、もうよほどおそいやろなあ、もうほどなう鳥がなくや
 ろ、いまは十分炭なければ、炭柴なければ、柴不自由なきや
 う、このおちつくばしよしやんせ、着物くいものばかりをたの

しみではない、さいしよさきになれば、どうなるといふはなしから、たのしまして、一筆かいて理たよりにつれてきた道である、あとく人々で合ふたる、これだけのはなし、外のはなしにつたへられん、萬事の咄しにもまぜることあれば、まぜるにまぜられんこともある、そこで刻げんくといふ、順序の咄しの理を傳てくれく。

△しばらくして

さあくゆつくり筆にとれ、さあく神が天下理咄しかけ、世界の道つくりたるも同じこと、事情の中とて尋ねたて萬事とせん、そこで刻限からき、わけ、ふるいくはなし一寸く傳へたる、何でもかでもふるいものは、よういでならん、ふるいものもなけにやならん、今筆とりてるものもある、又一人は

じつときいてゐるものも、こらふるい二代目のもの、おやく理き、わけ、それよりつみたてたこふのふの理、それよりなるほど、いふて、みなふみとまるが理こらこふのふからせかいで、とほり、あざやか、神の道からあざやか、元々めんくよりついた理よりはつちやわからん、あとくそふたるく、心の理よりむねにはまりたら、たづねる、見ても見んふりするほどつらいことない、くちでどんなこといふたて、みんふりするほどつらいものはない、またほんになるほどと、くちで人にまんどくさしたて、さうであつたかへなあ、しんのたづねあひ、ことばぞへはしんのまこと、まことはこれよりない、この咄しつたへばをさめかた、またはなしかたの理にもなる、どういふことにをさまるも、をさまらんも、ことばそへるが理、どうい

ふところにあるものも、かういふ所にあるものも、かげからこ
とばをそへる道なれど、人々より合ふた時は、くちでいふてあ
て、あとでふんといふてるやうなことではならん、まよはまつ
たて將來は神のをさめるところといふ、あすといへばあす、今
日といへば今日、今といへば今といふ、ふかき咄しであるほど
にくく、この道理き、わけ、三つそろた、これまで三つそろふ
たことはない、そろてもころがそろはねば、そろたとはいへ
ん、何もならん、この理よりたよりない、たよりなくばたのし
みない、これだけ十分つたへたら、どこでもおめもおそれもす
ることない、この道理の理を、ようき、わけてくれ。

おさしづ (明治三十一年) 終

昭和三年三月廿八日印刷
昭和三年四月一日發行

非賣品

奈良縣山添郡身振市町字布留百十二番地

編輯兼 天理教同志會
發行者 代表者 田邊要藏

不許
複製

大阪府南區巖谷中之町三十九番地

印刷所 合資中 村盛文堂
代表者 岡本省三

終

